

光耀

*Kagayou*

う



NOZAWA KASUMI

野沢霞



駅の改札を出て間もなく、高田えりはその青年に気づいた。ジーンズにベージュのハーフコートを着た青年が改札口を見つめていた。

一月七日正午に近い時刻だが、列車から降りて来る初詣の人々で駅構内は混雑していた。その雑踏の向こう、駅舎と隣接する書店の前に立つ彼は、早春の柔らかな陽光に包まれていた。その瑞々しい耀きは、けれどそれゆえに危うさもある、脱皮したばかりのかげろうの透明な薄みどりの羽を思わせた。これと同じ感覚を以前誰かに感じた事がある……思い出せないまま距離が縮まって、えりは目を伏せて彼の前を通り過ぎた。

「……高田先生」

ふいに呼ばれた。初めて聞く、静かな声。えりは振り向いて青年を見た。

「……泉りく、です」

はにかみながら青年は言った。

「泉……りく君……えっ？ あっ、高校生だった、あの？」

彼は苦笑しながら頷いた。

「まあ……でも、ああほんとうに、こうして見ると、りく君ね」

瞬時に記憶が蘇った。さつき青年を見た瞬間の感覚、あれは高校生の彼を初めて見たときの印象だったのだ。あのときの小柄な少年が、こんな見上げるような青年になっている。えりは真つすぐに彼を見つめた。

切れ長の大きな目、色白の頬と細い顎、一見女の子にも見える顔立ちは十五歳の泉りくにあつたものだ。が、長身の広い肩や首は大人の男のそれだった。幼さの残る貌と伸びやかな体とのアンバランス。中性的な雰囲気と漂わせた不思議な魅力があつた。

「りく君、この町だった？」

「……町の外れですが」

話しながら彼はときどき改札口の方を眺め、手に持ったスマートフォンを気にした。

「あれから何年経ちますか、よく分かったわねえ」

「……僕は二十六になりました……でも先生の顔は覚えてます。クリニックに行ったのは、あの一回だけですから」

静かな、しかしまだ大人になりきっていない少年の痕跡を秘めた清潔な声。

「先生じゃなくて、名前で呼んでね、もうクリニックは辞めたの。でもよかった、元氣そうで。今は何をしてるの？」

「こんな」

と彼は胸のポケットから名刺入れを取り出し、その中から一枚抜くと、

「家業を継いでます」

と差し出した。

名刺には会社の名前と、代表取締役・泉りく、と刷ってあった。

「まあ、社長さん？」

「小さな身内だけの会社です」

色白の頬が僅かに染まった。あの少年が……えりは幸せな気持ちになって、名刺をバッグに仕舞った。彼はまたスマホを見た。長い指が開かれ、再び電話を握り締めて閉じられると、大切な人を待っているに違いない、と思えてくるのだった。

「りく君に会えてよかったわ。とてもうれしい。じゃ、お元気で」

「先生も」

頷いて、えりは二十メートルほど先にあるバスターミナルまでゆっくり歩き、神社行きのバスを待つ人々の列の後ろに並んだ。古墳で知られる吉備路、その中心地にある創建年代不詳のこの古社は、学問向上や商売繁盛などで人気のある神社だった。息子の智也も一年前の今ごろ祈願の絵馬を受け、志望の大学に合格した。今日その絵馬を、電車で六駅乗って納めに来たのだった。

振り返ってみたが、青年の姿はもうなかった。時折突風が吹き抜け、真冬の冷たさを感じるものの、えりは温かな感情に支配されていた。彼はこの町の外れに

住んでいたのか。二十六歳の青年になった泉りくとの偶然の再会。一度きりだった面接を、憶えていたと言った彼の声を反芻していた。

泉りくとの出会いは、もう十年ほど前になるのか……。

えりは数年前まで、自宅から車で二十分ほどの所にあるメンタルクリニックに勤務していた。十年余りのカウンセラー時代、気になるクライアントは何人かいて、泉りくも、その中の一人だった。

その頃えりは三十代になったばかりで、心理カウンセラーになって三、四年が経っていた。勤務するクリニックは精神科医の院長と、男性一人、女性二人のカウンセラーがいた。初診は院長が面接し、心因性のクライアントにはその症状に合わせて適任のカウンセラーが担当した。

五月、若葉の艶やかな季節。けれど（木の芽時）と昔から言われるこのころになると、毎年、なぜか確実にクライエントは増えた。

彼らは通院を重ね、カウンセラーとの信頼関係が結ばれ始めると自分でも気づ

かないうちに一度胎児に戻り、再び生まれ、心の生長と共に親や社会との関係を結び直す。これは心を病んだ者たちが辿らなくてはならない道程で、幼児還りは快復に向かう目安になる。だが長い年月暗闇をさ迷い、やっと明が見えてきたというのに、再び退行してしまうのも春のこの時期だった。

その日の朝担当したのは、母親と少年だった。

「高田えりです」

白衣の胸のネームが見えるように挨拶し、テーブルを挟み親子と向かい合わせにソファに座った。高校一年だという少年は小柄で、少女と間違えるほど優しい顔立ちをしていた。

母親はすぐに、

「この子、学校に行かなくなっただんですよ。中学から私立の進学校に通わせていたんです。私が毎朝二時間かけて学校の近くまで送ってましてね。なのに高校生になつて一週間行つたきりで、急に」



一気に話し出した。

「一歩も、トイレ以外は部屋から出て来ないんです。どうして学校に行かないのかって、いつくら聞いても何も言わないんですよ。もう一カ月半もこんなふうで。それで今日やっとの思いでここに連れて来たんです」

シルクのワンピースを着て、厚いメイクをした母親は、手振りを交え訴えた。えりは頷きながら手元のカルテにメモしていった。

「部屋に閉じこもっているだけですか？何かほかには」

「いいえ、布団をかぶって寝てるだけです」

「食事や入浴は、どうしてますか」

「呼んでも出て来ないんですよ。それで食事は私が部屋の前に置いてます。お風呂は何日かに一度、家族が眠った後にシャワーを使ってるようです」

「分かりました」

えりはペンを置いて少年に目を向けた。

「りく君、学校か友達の間で、何かあったかな？」

軽快な口調で聞いた。

少年は口を真一文字に結んで、自分のスリッパの先をじっと見つめている。

「ね、学校に行かない事は悪い事ではないのよ」

母親が横から、

「先生、行かなかつたら将来どうなるんです、大学にだって進めないし。この子の姉は今大学生ですが、こんな事はなかつたんですよ。なのにこの子は、毎日寝てばかりいて」

大きく振った母親の手が少年の脇腹に当たり、彼は僅かに身体を捻った。

「お母さん、側から見ると、息子さんは何もしていないように見えるでしょうけれど、違いますよ。学校にいかない自分を責めているんです、毎日ね」

母親は眉根を寄せて、黙った。

「ねえ、りく君。学校に行かない事はいいとか悪いとかという問題ではないから